

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

阿寒観光とアイヌ文化に関する研究ノート：
昭和40年代までの阿寒紹介記事を中心に

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 玲子 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/5600 |

阿寒観光とアイヌ文化に関する研究ノート

—昭和40年代までの阿寒紹介記事を中心に—

齋 藤 玲 子*

Note on Research: History of relationship between
tourism in Akan National park and Ainu Culture
by compiling the remarks from the travel guide
magazines in Showa period (1926~1980's)

Reiko SAITO

Akan National Park is a popular resort whose volcanic landscape is well known worldwide, with its famous caldera-type lakes, hot springs, and virgin forests. Also the Ainu culture has attracted many tourists from the 1930's. "The Ainu Kotan: the largest Ainu village of Hokkaido" is lined with many souvenir shops along the Akan lakeside. The handicrafts such as wood carving, embroidery, and the traditional dance performing are offered for tourists by the residents.

This paper has compiled the remarks on the Ainu culture on tourism in Akan from various sources such as travel magazines and guidebooks. This study will be useful for the historical research of relationship between Ainu culture and Tourism in Hokkaido.

* 北海道立北方民族博物館学芸員

キーワード 阿寒(国立公園)、アイヌ文化、観光、旅行雑誌

Key Words Akan National park, Ainu Culture, Tourism, Traveler's Magazine

1. はじめに

阿寒は初期（昭和9年）に制定された国立公園の一つであり、昭和30年代には最も人気の高い周遊地となった日本有数の観光地である。国の特別天然記念物となっているマリモはいうまでもなく、阿寒湖、屈斜路湖、摩周湖と今も噴煙をあげる雌阿寒岳など火山性の景観、温泉、深い森などが観光客を引きつけている。

これら自然の魅力ある要素に加え、アイヌ文化もまた阿寒観光に大きな役割を果たしている。昭和10年代には、展覧会や出版物をとおして観光宣伝とともにアイヌ文化が紹介されてきたことは明らかであり、観光ポスターにアイヌ風俗が描かれることも多い。元来、阿寒湖畔地区には今のような大きな集落はなかったが、観光が盛んになるにつれ、工芸品販売や写真、歌や踊りなどアイヌ文化への需要が増え、人口も増えるに至った。現在、『阿寒湖アイヌコタン』は北海道で一番大きなアイヌコタン（36戸・約200人）〔阿寒アイヌ工芸協同組合〕と称されている。

明治・大正期から「アイヌ風俗」の見られる地として紹介されてきた旭川（近文地区）や白老より遅く、昭和に入ってから急激に観光地として脚光を浴びた阿寒は、湖畔地区だけでも今なお年間150万人の入り込みがある人気の場所である。それだけに、阿寒でアイヌ文化に触れ、理解を深めたいと考える旅行者も少なくないと思われ〔ペウレ・ウタリの会 1998〕、アイヌ文化を普及するためのさまざまな新しい試みも始められている。

本稿では、旅行雑誌等の出版物を収集・整理しながら、国立公園指定前から戦後の北海道観光ブームが落ちつきをみせる昭和40年代までの阿寒観光の歩みを概観する。阿寒でのアイヌ文化の変遷を検討することは、ひいては北海道観光とアイヌ文化の関わりや昭和期から現在に至るアイヌ文化観の形成、工芸・芸能の伝承過程を研究するうえでも示唆的な情報を供するものと考えらる。

2. 阿寒の概要

ここで「阿寒」といった場合、阿寒国立公園地域を指すことと定義し、「阿寒町」を意味するのではないことをお断りしておく。狭義には「阿寒湖畔（地区）」をも使用する。阿寒国立公園は、昭和9年12月4日に大雪山・日光・中部山岳・阿蘇くじゅう、とともに指定され、同年3月の瀬戸内海・雲仙・霧島に次いで、戦前に指定された初期の国立公園の一つとなっている（公園の名称は当時のまま）。面積は約905平方kmで、阿寒町・弟子屈町・美幌町・足寄町・津別町をはじめ11ヶ町村にまたがる広大な公園である。近年の入り込みは阿寒湖畔地区で年間150万人、阿寒国立公園全体では500万人にのぼるといふ。

阿寒へのアクセスの方法は何通りかあり、道東観光の中心といってよい。しかし、弟子屈町の川湯温泉以外は鉄道から遠く、自動車（バス）でなければ、阿寒湖畔などには行く

ことが出来ない。石北線の北見・網走を拠点に津別や美幌から入るコース、根室線の釧路を拠点に阿寒湖あるいは弟子屈から入るコース、根室線・石勝線の帯広を拠点に足寄から阿寒湖畔に入るコースなどいくつかのルートがある。

3. 阿寒観光の背景と経緯

次に、阿寒観光の歴史的経緯について、時代ごとの主たる出来事、交通等の基盤状況、出版物等マスコミでの取り扱いと広報活動、祭などの行事、アイヌ文化関連事項をまとめてみたい。仮に、1)明治期、2)大正～昭和9年の国立公園指定まで、3)昭和10年代、4)20年代、5)30年代、6)40年代、7)50年代以降、という時代区分を設定する(以下の年表は『阿寒町百年史』、種市佐改「阿寒国立公園物語」、『北海道観光連盟20周年記念誌』をベースにした)。

1) 明治期

明治20年代、本格化した硫黄山の採掘と標茶集治監の設置により、鉄道の敷設と道路の開削が相次ぎ、釧路からの交通路が整備された。そのため、弟子屈と川湯(弟子屈町)方面は明治中期には温泉旅館ができるなど早くに開けた。両地域に遅れて明治45年に阿寒湖畔に温泉宿が開業した。

全国的には明治20年に始まった小中学校の修学旅行が、30年代には阿寒でも行われるようになる。釧路の第一小学校(現日進小学校)は、明治33年7月に第3回修学旅行として高等科44名で標茶・弟子屈への4泊5日の旅を行っている。明治39年9月には、同校高等科3、4学年70名が雌阿寒岳登山を5泊6日で行った。その後も、大正期にかけて小学校から大学までの学生たちを中心とする登山が急速に一般化し、阿寒が注目されるようになった要因と考えられている[種市 1974]。

20年 標茶－硫黄山間に鉄道敷設

33年 釧路第一小学校が弟子屈に修学旅行

38年 (釧路第一、第二小学校) 雌阿寒岳登山の修学旅行

39年 前田正名が阿寒湖畔の開発に着手

45年 山浦政吉が阿寒湖畔に温泉宿を開業

*国の外郭団体として「ジャパン・ツーリスト・ビューロー」設立

2) 大正～国立公園指定前まで

阿寒が国立公園候補地となったのは、大正10年のことである。これを機に、道路整備をはじめとする観光のための開発が急ピッチで進むことになる。鉄道では釧網線の開通(昭

和6年全通)、今は廃線となった相生線(大正14年開通・美幌～津別町相生間)が大きな役割を果たすこととなり、それらを結ぶ自動車網が昭和初期に整う。阿寒湖畔へもバスが運行されるようになった。

また、登山よりやや遅れて、さらに底辺の広いスキーやキャンプの施設が阿寒にも登場する。大正末期には屈斜路湖で遊覧船事業も始まり、昭和に入ると阿寒湖でも数隻の船が競合する状態になる。

また、明治～大正期に活躍した随筆家の大町桂月が大正10年に阿寒を訪れ、阿寒湖一帯の景観に打たれて『文芸春秋』に詩で紹介した。13年には雑誌『旅』が発刊され、旅行情報が全国的に市民の文化として定着し始める時代である。

国立公園の誘致活動のためのパンフレットなども作成され、東京では写真展が開催されるなど、宣伝も盛んに行われるようになる。

大正

- 4年 弟子屈でスキーが初めて紹介される
- 10年 マリモが天然記念物に指定される
大町桂月、阿寒に来遊、詩で紹介
- 15年 舌辛(現阿寒町本町)～阿寒湖のバス運転開始

昭和

- 4年 岩淵モーター部創設(阿寒湖上遊覧船事業のさきがけ)
- 5年 阿寒横断道路完成
- 6年 阿寒国立公園期成同盟結成? 国立公園調査委員一行招待
釧網線(釧路～網走)全通
- 8年 阿寒国立公園観光協会創立
阿寒遊覧船(株)設立

3) 昭和9～10年代

国立公園になった阿寒は、最初の2、3年は入り込みも多くなったが、次第に戦争の影響が出始め、観光目的の旅行自体が減少していく厳しい時代を迎えることとなる。

しかしながら、国立公園誘致活動に引き続き、PR活動は熱心に展開された。最初に作られた本格的なポスターは、昭和9年に阿寒国立公園観光協会が作ったB全判のもので、図柄は原始林の中を走る自動車の後ろ姿(佐々木栄松・画)であった。

昭和10年に阿寒国立公園観光協会でパンフレット『阿寒』を発行(図1参照)、同じころ、札幌鉄道局発行の『北海道旅行の栞』でも、主要都市近郊と国立公園を中心とした観光案内等が掲載されている。昭和14年版の『阿寒』、12年版の『北海道旅行の栞』両パンフレットでは、阿寒国立公園内の屈斜路湖畔に「アイヌ部落/古丹/コタン」を示してい

る。

また、昭和11年には4公園が追加指定され、全部で12となった国立公園を紹介する展覧会が、東京の伊勢丹デパートで開かれた。翌昭和12年6月には、同じく東京の伊勢丹デパートで『観光の北海道展覧会』が開催された（主催：東京鉄道局、日本旅行協会、札幌鉄道局、北海道庁）。この展覧会については写真帳が残されており、好評を博した様子と会場の詳細を知ることができる。ここでは大雪と阿寒の両国立公園のジオラマが展示され、阿寒は摩周湖と屈斜路湖の展望が再現された。

その展覧会において、復元したチセ（アイヌの家）とそこでの熊彫の実演や、白老の宮本伊之助（エカシマトク）氏の講演も行われるなど、アイヌ文化が呼び物となっていたことがうかがわれる。大正の末に八雲と旭川で製作が始められた木彫り熊は、昭和10年代に急激に普及したものと見られ、このころ阿寒でも熊をはじめとする木彫りが製作・販売されるようになったことは明らかである。阿寒のみやげもの店に残されている初期の熊の木彫りを見ると、昭和8、9年ころまでは小さく素朴なものであったが、昭和10年代以降はかなり現在販売されているものに近い形になっているようだ。

さらに、ヤマモトタスケ著『阿寒国立公園とアイヌの伝説』という小冊子が昭和15年にジャパン・ツーリスト・ビューロー（札鉄旅客課援助・協力）から発行されている（図3参照）。著者の山本多助氏（1904～93）は、アイヌ文化の伝承者であり、活動家として著名な人物で、昭和10年に屈斜路湖畔で木彫りの製作と販売を始め、14年頃には阿寒湖畔に移って店を始めている。以後、まりも祭、舞踊保存会、ユーカラ劇、執筆活動などアイヌ文化の保存と阿寒観光の発展に寄与した。

また、当時の関連事項としては、日本民芸協会の『工藝』106・107号（昭和16・17年）にアイヌ文化の特集が組まれており、アイヌ工芸品を世に知らしめる役割を果たしたと考えられる。

その一方、昭和16年2月には、北海道庁はアイヌ（文化）を観光に利用する行為を防止するため、関係方面へ以下の通達を行っている。

「旧土人の中には今尚熊祭を行ひ、または往時の服装を為し、観光客より撮影料の寄捨を受け、或いは又府県を巡回して古来の舞踊を興行する外、往時の同族生活を講演行脚する者等有之やに及聞候、甚だ遺憾の次第有之候に付ては、…中略…今後一層戒め以て同族教化指導上遺憾なき期せられ度、為念。」

[昭和17年・北海道樺太年鑑]

- 9年 阿寒国立公園指定 初のB全判ポスター「阿寒」発行
- 11年 パンフレット「阿寒」を発行 東京で12国立公園の展覧会開催
- 12年 東京で「観光の北海道展」開催
舌辛村を阿寒村に改称
- 13年 ガソリン欠乏のため木炭バス導入
- 18年 バス業界の戦時統合（国立公園協会が国土健民会に改称）

19年 公園内の旅館が錬成施設等に売却続出 (7/17全国的に国立公園の業務停止)

4) 昭和20年代

戦後、外貨獲得のためと平和の象徴である「観光」を国家事業として官公庁が支援を行ったため、阿寒観光の復興も比較的早くに実現したと言える。平和の訪れとともに修学旅行もいち早く復活している。

交通事情では昭和20年代半ばからバス路線が急激に拡充され、横断道路や釧路-阿寒湖畔の定期バスが運行されるなどの基盤が整ってくるが、冬期の運行は40年代まで待つことになる。

出版や報道の面では、24年に雑誌『旅』で北海道特集が掲載され、以後、数年に1度は特集が組まれるようになる。ちなみにその号の表紙は、ムックリ（口琴）をひくアイヌの衣装を身に着けた女性の写真であった。

阿寒でのポスターやパンフレットの印刷にもいっそう力が入られるようになる。28年アイヌの女性を描いた「Hokkaido」で世界観光ポスターコンクールの最優秀賞を受賞した栗谷川健一氏が、その後の阿寒のポスターをいくつか手掛けており、丸木船に乗るアイヌの男女と湖中のまりもが描かれた「国立公園 阿寒」なども後に同コンクールで入賞している。また、29年には「阿寒国立公園漫画案内図」が釧路鉄道管理局から発行された。これらの印刷物には、アイヌの衣装（風のものを含む）を身につけた人物画が多く登場している。28年には英文パンフレットも発行されている。

後半には、「君の名は」のブームで美幌峠が有名になり、映画ロケや皇族の来遊などマスコミの力もあって、阿寒の名が全国的に知られるようになる。

観光に関わる行事としては、阿寒湖畔のまりも祭がさっぽろ雪まつりと同年の25年に第1回が開催された。アイヌの人たちが積極的に携わる行事として現在も続けられており、北海道の主要な祭の一つとして挙げられることも多い [合田 1977]。

現在にまで続く観光事業の多くが、20年代半ばに現れてくると言ってよいだろう。

- 20年 終戦 (GHQは国立公園等の保護保存を指令)
- 21年 北海道観光連盟設立
- 22年 阿寒国立公園観光協会再発足
- 23年 阿寒横断道路に初めて定期バス運転
釧路アイヌ古典舞踊保存会結成 (山本多助氏)
- 24年 雑誌『旅』6月号で、北海道特集
- 25年 第1回まりも祭開催
日本観光地百選で阿寒3湖が上位入選
- 27年 タンチョウとマリモが特別天然記念物に指定される

「君の名は」ラジオ放送開始。翌28年映画ロケ
29年 パンフレット「阿寒国立公園漫画案内図」「AKAN」(英文) 発行
昭和天皇・皇后行啓
川湯でイオマンテ(熊送り) 催行

5) 昭和30年代

昭和30年代は、国鉄の周遊券販売をはじめ航空機やフェリーの便もよくなり、全国的に陸・空・海路ともに交通事情やパック旅行が充実して、宿泊を伴う観光旅行に参加する割合が急激に伸び始める時代であった。

それに加え『挽歌』『森と湖のまつり』など阿寒周辺を舞台にした小説がベストセラーになり、昭和20年代に引き続き、阿寒が周知されることになる。35年には、雑誌『旅』の人気投票で阿寒が「行ってみたい周遊地」の第一位を獲得しており、その特集号では「これが最近の阿寒だ」というグラビアをはじめ、阿寒にまつわる記事が多数掲載された(別章を参照されたし)。

また、34年に前田光子が湖畔の土地を無償提供し、分散して生活していた住民が集結して「アイヌ部落」がつけられた。中央には各種行事の広場をつくり、38年には民芸品生産のための「アイヌ共同作業場」も設置されて、民芸品店が軒をつらねる現在の「阿寒湖アイヌコタン」のおおよその景観ができた。ここでの「アイヌ舞踊」の観覧も人気を呼ぶようになる。

一方で、みやげものとして本州産の大量生産品も出回るようになり、アイヌを見世物にしているなど、一部の文筆家などの間に観光地の「俗化」やアイヌ文化の変容が嘆かれるようになり始めるのもこの頃である。

- 31年 世界観光ポスターコンクールで「国立公園阿寒」がグランプリ受賞
阿寒湖アイヌ協会設立
- 32年 第25回全日本スピードスケート選手権大会が阿寒湖で開催
- 33年 皇太子(現天皇)来遊
- 34年 前田光子が湖畔の土地を提供し「アイヌ部落」成立
- 35年 雑誌『旅』人気投票(周遊券発売5周年記念)で阿寒が1位に。次いで十和田・雲仙の順
- 36年 阿寒水族博物館開館
第1回美幌峠まつり開催
- 38年 アイヌ共同作業場完成
- 39年 知床国立公園に指定 以後、阿寒と知床は一緒に紹介される機会が多くなる。

6) 昭和40年代

昭和30年代末の観光基本法の制定（38年）、昭和39年の東京オリンピック、海外旅行の自由化、東海道新幹線・名神高速道路の開通などをうけて、引き続き観光旅行が市民に浸透する時代であった。大阪万国博覧会を契機とする「大衆化」「大量化」「集中化」により、昭和45年は日本の観光旅行のターニングポイントとも評されている〔日本交通公社調査部 1994〕。

北海道では、昭和43（1968）年が明治初年からちょうど100年にあたるため、「開道百年記念」を冠する事業が多く開催され、博物館の開館や出版物の発行も相ついだ。

道路の除雪事情がよくなり、阿寒周辺でも通年開通が増えて、全道的に冬の観光にも力が入れられるようになる。

出版等では、国立公園指定30年記念作成のポスター「まりもの阿寒湖 Lake Akan」が45年に日本観光ポスターコンクール奨励賞を受賞した。そのデザインは伝統的な衣装を身につけた若いアイヌの女性が湖畔の丸木船に腰掛け、ムックリ（口琴）を手にしている写真を全面的に使用したものだった。

40年 阿寒湖バスセンター完成

41年 第1回美幌雪まつり

第1回屈斜路湖水まつり

42年 第1回摩周湖樹氷まつり

第1回硫黄山噴火まつり

43年 阿寒アイヌ民族文化保存会結成

阿寒湖ビジターセンター（道立）開館

45年 第1回阿寒湖水まつり開催

日本観光ポスターコンクール奨励賞受賞

48年 阿寒湖～摩周湖～美幌峠～美幌間の阿寒パノラマコースが通年バスの運行開始

7) 昭和50年代以降

50年代以降については別稿に改めたいと考えているが、あえて概観するなら、それまでの北海道観光ブームも一段落し、その間に生じた問題をふまえたで、アイヌの人たちが自主的に新しい形の観光や文化伝承に取り組んできた時代、と言えるだろう。その徴候は40年代半ばから見られ始め、51年の北海道ウタリ協会文化対策部による「北海道の観光とアイヌ問題」実地調査、57年のアイヌ民俗資料館開館（屈斜路コタン）、58年の阿寒湖アイヌ古式舞踊ほかが国の重要無形民俗文化財に指定、などからアイヌ文化に対する責任感・自覚の急速な高まりが読みとれるからである。

4. 観光におけるアイヌに関する記述の変遷

次に、阿寒観光（一部、北海道全般・旭川や白老の観光）を紹介する文献から、アイヌに関する記述の抜粋をし、その変遷を見ていきたい。

明治末期から昭和初期までの旅行案内等では、アイヌの習俗が見られる場所として旭川と白老をあげるところがほとんどである。昭和初期の国立公園指定前までの阿寒においては、アイヌが道路開削の道案内であったとか、温泉発見のきっかけ、地名の由来としてのアイヌの存在が挙げられる程度でアイヌ（文化）についてことさら強調されてはいない。しかし、昭和10年代以降は観光のみどころの一つとして必ずアイヌに関する記述があるといつてよい。

現在、多様な出版物からの観光地におけるアイヌ関係記述を収集しているところであるが、本稿ではガイドブック、パンフレット、旅行雑誌を中心に記事を抜粋し、当時の様相をよく表していると思われるものを時代順に並べてみることにした。尚、現在では不適切と思われる表現も原文のまま引用することとし、旧字体は一部新字に改めた。

○明治45年 北海道鉄道管理局『北海道鉄道沿線案内』より

「【土人部落】近文駅付近に土人保護給与地あり。部落を成し戸数五十余、人口百九十余、農業を営む。旭川町に於ては此部落の爲め、小学校農事試作場を設け、専らその指導保護に努め居れり。

…中略…

名物 旭豆、アイヌ細工。」

○昭和7年 山崎鑿一郎『北海道の展望』より

「アイヌ風俗（一） 旭川から約四軒、近文驛付近に約三百戸ばかりの近文土人部落がある。又、室蘭本線白老驛から約半軒の處にも戸数八十戸の白老土人部落がある。その何れかを訪ねて、アイヌの生活を知ることとは、彼等が其の昔蝦夷と呼ばれて、北海道を我が家としていた民族である丈に、本島とは切離すことのない色々な関係があるが故に、大いに興趣のあるものである。…後略」

○昭和15年 ヤマトタスケ『阿寒国立公園とアイヌの伝説』より

「観光の頃ともなれば、雄大神秘の阿寒地帯に杖引く人が多くなり、アイヌ細工を製作販売する私の店にも沢山の観光客が立ち寄ります。そしていろいろアイヌについて尋ねます。地名の事、草木、鳥魚のアイヌ名のこと、或は古老と話がしたい、伝説がききたい、アイヌ踊りや歌をききたい、日日の挨拶はどんな風か、など尋ねられるのです。」

○以下は昭和24『旅』6月号に掲載されたものであるが、その当時のことばかりではなく、回顧も含まれている。

・明治末期～大正半ば頃の回顧と推測され、「後年（筆者下線）」は大正末以降のことと考えられる。林常夫「阿寒草分けの頃」より。

「さるにても舟首に權をとって立つ音吉親爺（ちゃちゃ）の姿のすばらしさよ。アイヌ男特有の眼鼻だち、長髯から、そのポーズ一切が典型的なモデルである。全く見とれる程の雄姿である。物心、動静一切が渾然と融和した小天地が刻々移り変わって行く。此の時のことは其後似たものにも出会ぬ私の秘寶である。此音吉は後年阿寒湖畔に住み、素直に写真のモデルにもなり、人々に非常に愛せられた有名人である。」

・昭和10年代後半と推測される 更科源蔵「コタンの人々 ーわがアイヌの友ー」より

「或る日彼（アイヌの知人；筆者注）が摩周湖を見に行っていた。するとそこへハイヤーで乗りつけた観光客が、あまりに見事な原始人である彼にすっかり感心して、あなたが摩周湖を見ている写真を一枚写させてくれないかとおそろおそろ頼み込んだところ、案外彼は素直に承知したので …中略… 「あっちを向いて五円だから、こっちを向いたのも五円だ」とモデル料を請求したものだ。」

・佐々木朔「食べる北海道」より

「北海道といえばアイヌ人と熊と鮭とが三大断になっているのであるが、…中略… 阿寒の山中に永年住んで居る阿寒湖荘の主人吉島氏も熊の味覚は知らぬとの話であった。北海道を旅すれば、アイヌの一刀刻の熊は何処でも手に入るが、生きた熊は仲々見られない…」

○昭和33年 北海タイムス社『北海道大博覧会記念 北海道の観光と産業』

「支笏湖のちかくの白老町は、アイヌ部落で観光客に馴染みがふかい。アイヌの生活習慣と家屋が残されていて、酋長がいつでも説明の労をとってくれる。民芸品や叙事詩ユーカラの国碑、イオマンテ（熊祭り）などの信仰の風習が、亡びゆく民族の悲しみをこえて少数のアイヌたちによって守られている。旭川市の近文、日高の平取町には、まだアイヌ部落が姿をとどめているが、純粋のアイヌは年々少なくなるばかり、道内に生活している約1万人のアイヌは、ほとんど一般のくらしのなかに溶けこんでしまった。生きていく遅しさが足りないという批判もあるが、少数民族の生活習慣を観光の売りものにして生きていく人たちにも、それなりの切実な歴史が綴られているのである。

アイヌとクマはきりはなせない。この民族の神話の時代からのつきあいである。

ことしになってから、阿寒のバス通路に子グマが寝ていて、本州のお客さんをびっくりさせた。クマはいまでは観光地の愛敬者である。温泉でも都市でも面会に不自由しない。」

○昭和33年 遠藤利雄『阿寒の千一夜』『阿寒俗化の防止策』の章

「…アイヌと阿寒の関係が余りにも等閑にふされているのではなからうかと思う。それが全然ないというのではない。熊の木彫りをする職人もいるし、アツシを着たモデルもいるし、歴史や伝説にもない“まりも祭り”を、古代からあったような儀式そこのけで出演するアイヌもいるにはいる。どれをみても、見世物的でみすばらしくついでいけないのである。観光客が一番最初に興味をそゝるのは、アイヌなのではなからうか…」

として、建築物にアイヌの文様を取り入れたりアイヌの歴史や慣習を伝える工夫をし、「先住民族であるアイヌは、われわれと同化されているのであるから、見世物視したり、みすばらしくしてはいけない。雄大な自然美と原始美にマツチするようにすべきだ」と結んでいる。

○昭和35年の『旅』10月号・人気投票で1位となった阿寒の特集記事、少々長いがアイヌに関連する文章を抜粋してみたい。

・更科源蔵「ふるさと阿寒の50年」

「…然し木で熊の形を刻むということは、すでにアイヌではなく、立派な日本的根性である。アイヌの人達には物の像をつくることは厳しいタブーであったからである。もう阿寒にはアイヌはいない。」

・弟子豊治氏からの聞き書き「熊彫り男の生活と意見」

「冬眠のこの湖畔でこつこつとつくりだめた木彫りグマやアイヌ人形を店頭に並べ、店先にしつらえた作業台にあぐらをかいて日がなノミをふるう。…中略… 日に7、8千円の売上はある。だがこの“みやげ品”にも商の風は激しく厳しい。

大量生産の“メイド・イン・日光”の盆状差などがレットルをかえて逆流し本場ものの商圏を食い。腕一本のアイヌ木彫り師たちのくらしをおびやかす。加えて北海道ブームも頭打ち、アイヌ風俗もいささか食傷気味。冷やかしの客ばかり増える昨今だ。

…中略…

アイヌ —それはエキゾチシズムを売る観光北海道の泣きどころ。だが、この民族の“商品化”について

は同族間にも賛否分かれて冷たい反目さえ生んでいる。アイヌ風俗でモデル料をとる老人。今は遺跡にしか過ぎぬコタンの藁小屋を再現して客を呼ぶ一団に“同族の屈辱だ”と眉をひそめるのは釧路など都市に住むアイヌに多い。だが弟子さんは必ずしもそれが民族の恥部だとは考えていない。酋長の風俗も観光のヒトコマだとドライに割り切っている。…後略

・編集部「阿寒一帯の観光ポイント」

「この阿寒湖畔にはアイヌ部落があり（グラビア参照）一人50円出すと、アイヌの踊りをみせてくれる。グラビアで紹介した酋長以下「口三味線」をならして独特な音色を出してみせてくれるので一興だ。これを知らぬ人が多い。」

○昭和40年代

・昭和41年版『観光北海道』

阿寒湖紹介のページで、「子グマを行水させるアイヌ青年」の説明で正装した二人の男性とクマ1頭の写真が掲載されている。

・昭和42年『旅』7月号 北海道特集「阿寒・摩周湖」（編集部）

「バス道の両側には、近年ますます規模、施設の立派になった旅館や、アイヌのみやげ物屋が建ち並び、観光地らしい体裁を整えている。温泉町は、かつての原始境も姿を消してしまっただが、年間50万人からの観光客が押し寄せる今日の現状では、それも止むを得ないことだろう。

ここには、アイヌ部落もあるが、200人近い人々のほとんどが現在ではクマの木彫や観光みやげの販売に従事している。観光シーズンの最中には、観光客で部落はいっぱいになる程だ。

ここで人気があるのは“チセ”（家）と呼ばれる部落の中央にある小劇場。民族衣装を着飾った部落の主婦や娘さんたちのくりひろげる歌や踊りの教々は、訪れる観光客を喜ばせている。」

・昭和45年『旅』7月号「にわかには盛り上がるアイヌをめぐる動き」（おそらく編集部）

「今年の春、北海道議会でアイヌ問題が取り上げられ、ある議員が「修学旅行の生徒のなかにはアイヌもいるのに、観光地のバスガイドなどはおもしろおかしくアイヌ伝説を取り上げている。観光ポスターなどもアイヌを観光資源として売り込むものが多い」と理事者側にかみついた。

これに限らずアイヌへのいろいろな意味での関心は、昨年あたりからにわかには盛り上がってきたようである。…中略…

いわゆる“観光アイヌ”のコタンは、道内に白老、登別、昭和新山、阿寒湖畔、嵐山（旭川）などにある。昭和新山は旭川アイヌが主流であったり、地元で観光商売をやるのを恥じて他の土地へ“出張”することが多いのだが、最近では“シャモ（和人）がいい加減なアイヌを演出して金もうけをやるくらいなら、自分たちが本物をやろう”といったムードが出ているとか。…後略

4. まとめに代えて

以上、明治期から昭和40年代までの観光地としての阿寒とアイヌ文化の変遷を概観してきた。資料不足ではあるが、今回の研究ノートをまとめることで、おおまかな流れをつかめたように思う。時代ごとに呼び物となっていた工芸や芸能をはじめ、地名の由来などアイヌ文化への根本的な関心事は昭和10年代から変わっていないのかもしれないが、見せるため、売れるための形態や手法が、観光に携わる人びとの努力によって開発され、継承されてきたことも読みとることができる。さらにこれらの内容を分析していくことで、観光客のアイヌ文化に対する需要と、アイヌ文化の担い手たちの提供するものとの関わりを知ることができるように思われる。

今後も旅行雑誌などで紹介されてきたアイヌ（文化）はどのように変化し、時代背景や北海道全体の観光の動きとどのように関わってきたかについて検証してみたいと考えている。本研究が観光関係者にとっても、本道観光とアイヌ文化の歴史を知るうえで何らかの役にたつものであることを信じたい。

*本稿は、平成10年度文部省科学研究費補助金「アイヌをめぐる社会政治的状況に関する人類学的研究」（課題番号10610305；代表スチュアート ヘンリ）による調査成果を中間報告としてまとめたものである。

参考文献

阿寒国立公園指定五十周年記念誌編纂委員会（種市佐改編集）

1984 『阿寒国立公園指定五十周年記念 目で見る阿寒国立公園史』阿寒国立公園広域観光協議会

阿寒町史編纂委員会

1986 『阿寒町百年史』阿寒町役場

阿寒アイヌ工芸協同組合

1999年版 「民芸品と踊りの里 阿寒湖アイヌコタン」（パンフレット）

遠藤利雄

1958 『阿寒の千一夜』東北海道社（昭和32年刊『釧路の365日』を改訂）

小樽新聞

1942 『北海道樺太年鑑』小樽新聞株式会社

合田一道

1977 『北海道 祭の旅』北海道新聞社

齋藤玲子

1994 「北方民族文化における観光人類学的視点(1)－江戸～大正期におけるアイヌの場合－」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第3号 pp.139-160

種市佐改 著・編

1974 「阿寒国立公園物語」阿寒町ほか編『阿寒国立公園指定四十周年記念誌』阿寒国立公園広域観光推進協議会

1984 「阿寒国立公園指定50周年記念 阿寒国立公園の三恩人」（ざつがく新書2）釧路観光連盟

日本交通公社（日本旅行協会、ジャパン・ツーリスト・ビューロー）

1924～ 『旅』

1989 『「旅」に刻まれた昭和の記録』（「旅」復刻版付録）JTB出版事業局

(財) 日本交通公社調査部 編

1994 『観光読本』 東洋経済新報社

ペウレ・ウタリの会編集委員会

1998 『ペウレ・ウタリ ーペウレ・ウタリの会30年の軌跡ー』 ペウレ・ウタリの会
(社) 北海道ウタリ協会

1977 『先駆者の集い』 14・15号

(社) 北海道観光連盟

1982 『北海道観光連盟20周年記念誌』

北海道新聞社

1950～66 『観光北海道』

北海タイムス社

1958 『北海道大博覧会記念 北海道の観光と産業』

山崎鋈一郎編

1932 『北海道の展望』 山崎鋈一郎発行 (発売元; 富貴堂書房)

ヤマモトタスケ (山本多助)

1940 『阿寒国立公園とアイヌの伝説』 日本旅行協会 (ジャパン・ツーリスト・
ビューロー)

未詳 (主催: 東京鉄道局、日本旅行協会、札幌鉄道局、北海道庁)

1937 『観光の北海道展覧会』 写真帳



現在の「阿寒湖アイヌコタン」



図1 『阿寒』 阿寒国立公園観光協会発行 昭和14年版



図3 『阿寒国立公園とアイヌの伝説』
日本旅行協会発行 昭和15年

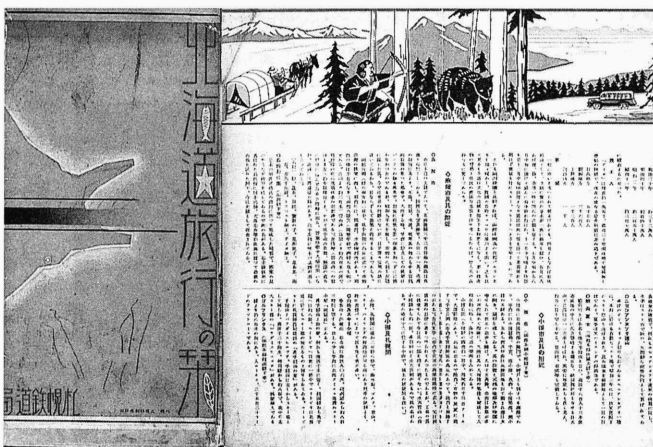


図2 『北海道旅行の葉』 札幌鉄道局発行 昭和12年版



図4 『阿寒国立公園漫画案内図』
釧路鉄道管理局発行
発行年未詳(昭和29年以降)